

# 教育研究業績書

2018年05月14日

所属：心理・社会福祉学科

資格：准教授

氏名：玉木 健弘

研究分野	研究内容のキーワード
臨床心理学、教育臨床心理学 犯罪心理学	攻撃性、不登校、いじめ、発達障害、社会的情報処理過程、心理検査法
学位	最終学歴
博士（学術）、修士（教育学）	徳島文理大学大学院 家政学研究科 人間生活学専攻 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. 進路選択における受動的態度から能動的態度への行動変容の試み	2014年4月～2015年3月	初期演習の授業の中で、学生の進路選択意識の形成および向上を試みた。キャリアセンターが提供するプログラムの活用だけでなく、独自プログラムを実施した。プログラムは、①書籍やインターネットを使用して、進路について学生個人が考える。②保護者や知り合いの社会人に対して、インタビューを行う。③グループで、①と②の資料を出し合い、グループ討議を行う。④これまでの資料を基に、グループで話し合った内容をパワーポイントを用いて発表する。 以上の事を行った。
2. 専門論文の読み方	2012年4月～2013年3月	初期演習および専門演習ⅠAの授業の中で、心理学および社会福祉学の専門論文を読むための基本的な知識を身につけるため、実際の専門論文を読み、読み方の訓練を行った。希望するコースの専門論文だけでなく、希望しないコースの専門論文を読むことで、人間理解を深め、論文のおもしろさを気づくことを目指した。
3. 講義内容の理解を深めるための双方向授業の実施	2011年4月～現在	短大心理学概論Bの授業の中で、毎回の講義で生じた疑問を解決するため、毎回の講義終了後に質問カードを配付している。質問カードに記入された質問を次回の講義で説明し、講義内容の理解を高めている。
4. 心理査定法の取得	2009年4月～現在	大学院の科目である臨床心理査定特論Ⅰにおいて、①予習②確認テスト③実習④復習のサイクルで、心理査定法の理論、解釈方法、ならびに実施方法を身に修得させている。
5. 「教養ゼミ」におけるピア・サポート訓練	2008年4月～2008年7月	1年生対象の必修授業である教養ゼミにおいて、大学生生活への不安を取り除き、大学生活への適応を促すためにピア・サポート訓練を行った。自己理解と他者理解、自己表現、コミュニケーション、傾聴など、ねらいごとに課題を設け、毎回、実習と振り返りを中心とした体験学習を行った。本プログラムは、継続的に実施されているプログラムであり、個の成長と対人関係の構築に役立っている。
6. 地域貢献を兼ねた心理学課題実習の実践	2006年9月～2007年3月	大学生3年生の心理学課題実習として、不登校児童生徒を対象としたキャンプスタッフとして大学生が参加をした。このキャンプは、広島県教育委員会が主催する青少年の自立支援事業として行われるものである。この事業に参加するにあたり、大学生は、不登校児童生徒との関わるための必要な知識や技能を学習した。
7. 地域貢献を兼ねた心理学課題実習の実践	2005年9月～2006年2月	大学生3年生の心理学課題実習として、不登校児童生徒を対象としたキャンプスタッフとして大学生が参加をした。このキャンプは、広島県教育委員会が主催する青少年の自立支援事業として行われるものである。この事業に参加するにあたり、大学生は、不登校児童生徒との関わるための必要な知識や技能を学習した。
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 仲間関係づくりおよび討論能力向上資料の作成	2016年4月1日～現在	初期演習で使用する仲間関係づくりおよび討論能力の向上を目指した資料を作成している。
2. 初期演習における文章作成訓練	2011年4月1日	心理学レポートの作成および就職活動で必要となる文章作成能力の向上を目的として、課題プリントなどの作成を行った。課題プリントは、基本的な文章の書き方から段落構成などを含み、初期演習の時間に実施した。
3. 心理学実験実習教材	2006年4月1日	心理学実験実習で使用する教材の要求水準ならびに質問紙の作成の章を担当した。まず、要求水準の章では、実験計画の立て方、実験方法、結果のまとめ方、考察など基本的なことが学べるように作成した。質問紙の作成の章では、質問紙に作成での注意点、信頼性、妥当性などの専門用語の説明をするとともに、実際に質問紙を作成することにより、理論だけでなく実践面でも学ぶことができるように作成した。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		
1. 高校生に対する模擬授業の実施	2016年7月21日	兵庫県立宝塚高等学校の生徒に対して、「心理学につ

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>4 その他</b>		
2. 高校生に対する模擬授業の実施	2016年2月24日	「いてー認知・行動面から考える」というタイトルで模擬授業を行った。 武庫川女子大学附属高等学校との高大連携授業(心理学)を担当した。
3. 短期大学部改革委員(学科)	2015年6月～現在	文学部心理・社会福祉学科短期大学部改革委員を務めている。
4. 倫理審査運営委員会委員(学科)	2015年4月～現在	短期大学部人間関係/心理・人間関係学科、文学部心理・社会福祉学科、ならびに大学院文学研究科臨床心理学専攻の倫理審査運営委員会の委員を務めている。
5. 倫理審査ワーキンググループ委員(学科)	2015年3月～現在	短期大学部人間関係学科、文学部心理・社会福祉学科、ならびに大学院文学研究科臨床心理学専攻の倫理審査ワーキンググループの委員を務めている。
6. 学生委員	2014年4月～2016年3月	短期大学部人間関係/心理・人間関係学科の学生委員を務めている。
7. 「学生の自立を促す教育」のための調査及び研究プロジェクト企画実施委員会委員	2013年5月～2014年3月	「学生の自立を促す教育」のための調査及び研究プロジェクト企画実施委員会の委員を務めた。
8. 和歌山大学での非常勤講師	2013年4月～2014年3月	国立大学法人和歌山大学教育学部で発達相談研究の非常勤講師を務めた。
9. 学生委員会文化部委員会(常任)	2012年4月～2016年3月	大学・短期大学の学生委員会文化部委員会(常任)を務めている。
10. 福山大学での非常勤講師	2011年9月～2012年3月	学校法人福山大学福山大学人間文化学部で教育相談の非常勤講師を務めた。
11. 福山平成大学での非常勤講師	2011年4月～2011年9月	学校法人福山大学福山平成大学看護学部で臨床心理学の非常勤講師を務めた。
12. 福山大学での非常勤講師	2010年9月～2011年3月	学校法人福山大学福山大学人間文化学部で教育相談の非常勤講師を務めた。
13. 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所研究委員	2010年4月～現在	武庫川女子大学発達臨床心理学研究所研究委員を務めている。
14. 学生委員	2010年4月～2012年3月	文学部心理・社会福祉学科の学生委員を務めた。
15. キャンパスガイド編集委員	2010年4月～2011年3月	短期大学部人間関係学科、文学部心理・社会福祉学科、ならびに大学院文学研究科臨床心理学専攻のキャンパスガイド編集委員を務めた。
16. 国際交流委員	2009年4月～2010年3月	短期大学部人間関係学科ならびに文学部心理・社会福祉学科の国際交流委員を務めた。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 幼稚園専修免許	2013年4月1日～2013年9月13日	教育心理学(教職)において関係する資格である。
2. 小学校専修免許	2013年4月1日～2013年9月13日	教育心理学(教職)において関係する資格である。
3. 臨床心理士	2009年4月1日～現在	大学院科目である、臨床心理査定特論Ⅰ、臨床心理実習Ⅰ・Ⅱにおいて関係する資格である。
4. 学校心理士	2009年4月1日～現在	大学院科目である、臨床心理査定特論Ⅰ、臨床心理実習Ⅰ・Ⅱにおいて関係する資格である。
5. 保育士	2009年4月1日～現在	乳幼児を対象としたケース、乳幼児を抱える保護者に対する助言・指導、また、保育士資格を取得したい学生に対する指導に関係する資格である。
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 中学生女子と母親の母子並行面接のスーパーヴァイズ	2016年7月～現在	大学院生が担当している、不登校傾向の中学生女子と母親の母子並行面接のスーパーヴァイズを行っている。
2. 小学生男子のプレイセラピーに対するスーパーバイズ	2015年5月～現在	大学院生に対して、小学生男子のプレイセラピーのスーパーバイズを行っている。毎回のプレイセラピーの様子から、本児の行動傾向や会話を分析し、関わり方について指導を行っている。
3. 成人男性に対するカウンセリング	2015年5月～2015年10月	成人男性に対して、カウンセリングを行っている。また、カウンセリングだけでなく、心理検査の結果から現在の状態を説明し、今後の方針について話をしている。
4. 小学生男子の母親面接に対するスーパーバイズ	2015年4月～2016年4月	研究生に対して、小学生男子の母親面接のスーパーバイズを行っている。毎回の面接場面から、本児の行動傾向や会話を分析し、関わり方について指導を行っている。
5. 小学生男子のプレイセラピーに対するスーパーバイズ	2015年4月～2016年4月	研究生に対して、小学生男子のプレイセラピーのスーパーバイズを行っている。毎回のプレイセラピーの様子から、本児の行動傾向や会話を分析し、関わり方について指導を行っている。
6. 西宮市いじめ防止等対策委員会副委員長	2015年2月～現在	兵庫県西宮市教育委員が設置する、西宮市いじめ防止等対策委員会の副委員長を務める。本委員会は、いじめ防

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
7. 小学生男子の母親に対するカウンセリング	2013年6月～2014年1月	止対策推進法に基づいて設置され、重大事案が発生した場合、本委員会が事実関係の調査や再発防止策について諮問する。 小学生男子の母親に対して、カウンセリングを行った。家庭、学校および学外活動での様子を聴き、本児の行動特性を分析し、今後の関わり方について助言を行った。
8. 年長女兒の母親に対するカウンセリング	2013年5月～2013年5月	年長女兒の行動に不安がある母親に対して、カウンセリングを行った。その中で、本児の問題傾向について行動分析を行い、家庭での関わり方について助言を行った。
9. 中学生女子の面接に対するスーパーバイズ	2013年2月～2015年3月	修了生に対して、中学生女子の面接のスーパーバイズを行っている。また、心理検査の指導および、毎回の面接場面から本児の行動傾向や会話を分析し、関わり方について指導を行っている。
10. 小学生男子の母親に対するカウンセリング	2013年10月～2013年10月	小学生男子の母親に対して、カウンセリングを行った。家庭および学校での様子を聴き、本児の行動特性を分析し、今後の関わり方について助言を行った。
11. 小学生女子の母親に対するカウンセリング	2013年1月～2013年1月	小学生女子の母親に対して、カウンセリングを行った。その中で、本児の問題傾向について行動分析を行い、家庭での関わり方について助言を行った。
12. 年長女兒の母親に対するカウンセリング	2012年9月～2012年10月	年長女兒の母親に対して、カウンセリングを行った。その中で、女兒の問題傾向について行動分析を行い、家庭での関わり方について助言を行った。
13. 川西市青少年問題協議会専門委員	2012年8月～2013年3月	兵庫県川西市において、「子ども・若者育成支援推進法」に基づき、様々な関係機関がネットワークを形成し支援していくための方向性を示した「川西市子ども・若者育成支援計画～げんきな若者かわにしプラン～」の作成の委員を務めた。
14. 小学生女子のプレイセラピーに対するスーパーバイズ	2012年11月～2014年3月	大学院生に対して、小学生女子のプレイセラピーのスーパーバイズを行った。また、心理検査の指導だけでなく、毎回のプレイセラピーの様子から、本児の行動傾向や会話を分析し、関わり方について指導を行った。
15. 小学生女子の母親に対するカウンセリング	2012年11月～2014年3月	小学生女子の母親に対して、カウンセリングを行った。また、カウンセリングだけでなく、心理検査の結果から本児の特性を分析し、今後の関わり方について助言を行った。
16. 小学生女子の母親に対するカウンセリング	2011年5月～2012年5月	小学生女子の母親に対して、カウンセリングを行った。その中で、本児の問題傾向について行動分析を行い、家庭での関わり方について助言を行った。
17. 小学生男子のプレイセラピーに対するスーパーバイズ	2011年1月～2012年3月	小学生男子に対して、プレイセラピーのスーパーバイズを行った。また、心理検査の実施指導およびプレイセラピーについて指導を行った。その中で、本児の社会的スキル、共感性および協調性が身につけられる事ができる関わり方について指導を行った。
18. 小学生男子の母親に対するカウンセリング	2011年1月～2012年3月	小学生男子の母親に対して、カウンセリングを行った。また、カウンセリングだけでなく、心理検査の結果から本児の特性を分析し、今後の関わり方について助言を行った。
19. 幼児の母親に対するカウンセリング	2010年7月～2010年7月	幼児の発達に不安がある母親に対して、カウンセリングを行った。その中で、幼児の問題傾向について行動分析を行い、家庭での関わり方について助言を行った。
20. 小学生女子の母親に対するカウンセリング	2009年9月～2010年3月	小学生女子の母親に対して、カウンセリングを行った。本児の問題傾向について、行動分析を行い、家庭での関わり方について助言を行った。
21. 小学生女子のプレイセラピーに対するスーパーバイズ	2009年9月～2010年3月	大学院生に対して、小学生女子のプレイセラピーのスーパーバイズを行った。毎回のプレイセラピーの様子から、本児の行動傾向や会話を分析し、関わり方について指導を行った。
22. 小学生男子に対するプレイセラピー	2009年5月～2012年3月	小学生男子に対して、プレイセラピーを行った。男子の特性に合わせた内容を検討し、社会的スキル、共感性および協調性が身につけられる事を目的としたとプレイセラピーを行った。
23. 尾道市広域通信制・単位制高等学校審議会委員	2007年9月～2009年3月	尾道市が平成19年7月に国から構造改革特別区域「尾道市人間教育特区」の認定を受け、市の認可を受けた学校設置会社による学校設置事業が可能となった。この事業により設置された広域通信制・単位制高等学校について審議する審議会委員を務めた。
24. 福山市立中学校生徒事案に関する調査委員会委員	2006年12月～2007年5月	福山市教育委員会が設置した、「福山市立中学校生徒事案に関する調査委員会」の委員を務めた。
25. 広島県教育委員会青少年の自立支援事業企画運営会議委員	2005年6月～2007年3月	広島県教育委員会が主催する、「青少年の自立支援事業」の企画運営会議委員を務めた。
<b>4 その他</b>		
1. 学科心理コース予算担当	2016年4月～現在	学科心理コース予算を担当している。
研究業績等に関する事項		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 発達と臨床の心理学	共	2012年9月	ナカニシヤ出版	本書は、心理的な問題を抱えている人々を支援するうえで、発達の知識を現実活かし、臨床心理の専門家ならびに臨床の場で実践する人を養成することを目的としている。また、本書は10章から構成されており、それぞれの章に、事例、発達の背景と臨床的な問題、かかわり方のポイント、発展的課題が設定されている。筆者の担当部分は第10章臨床的アプローチ—認知行動療法に焦点を当てて—(pp. 161-175)である。 (編者：渡辺弥生・榎本淳子，分担執筆者：玉木健弘，他20名)
2. 教師カウンセラー・実践ハンドブック—教育実践活動に役立つカウンセリングマインドとスキル—	共	2010年12月	金子書房	本書は、学校カウンセリングに関する諸理論を基礎として、教師カウンセラーの教育実践活動に役立つ、カウンセリングマインドとスキルについて解説している。内容は、教育専門職としての資質と力量を高める事について具体的・実践的に説明している。筆者の担当部分は、第5章3認知行動カウンセリング(pp. 86-87)である。 (編者：上地安昭，分担執筆者：玉木健弘，他61名)
3. 基礎から学ぶ心理学・臨床心理学	共	2009年4月	北大路書房	本書は、心理学、教育心理学ならびに臨床心理学などの基本知識を網羅した著書である。本書は、第I部心理学、第II部臨床心理学のII部構成からなっており、専門的な心理学および臨床心理学を学べるように構成されている。筆者は、第11章第5節認知行動療法(pp. 209-212)を執筆した。 (編者：山祐嗣，小林知博，山口素子，分担執筆者：玉木健弘，他33名)
4. 原著で学ぶ社会性の発達	共	2008年3月	ナカニシヤ出版	本書は、発達心理学の領域の中で、社会性の発達に関する研究についてまとめたものである。本書は、9章からなり、社会性および認知に関連する研究がまとめられている。各章で、代表的な研究が3本ほど取り上げられている。担当部分は、第5章セルフ・コントロール5-3攻撃性(p. 120-p. 1275)である。 (編者：渡辺弥生・伊藤順子・杉村伸一郎，分担執筆：玉木健弘，他24名)
5. 心理学・臨床心理学入門ゼミナール	共	2006年3月	北大路書房	本書は、心理学全般ならびに教育心理学、臨床心理学などについて、学部生および大学院生を対象とした専門書である。心理学全般から臨床心理学の基礎から応用までを学べるように構成されている。筆者の担当は、教育現場で活用されている認知行動療法を執筆した。担当部分は、第II部臨床心理学、第19章心理療法の実践、第3節認知行動療法(p. 163-p. 165)である。 (編者：島井哲志・池見陽，分担執筆：玉木健弘，他35名)
<b>2 学位論文</b>				
1. 小中学生の攻撃性がストレス反応へ及ぼす影響に関する心理学的研究—社会的情報処理過程を媒介要因とした因果関係の分析—	単	2004年4月	徳島文理大学大学院博士後期課程学位論文	小中学生が特异的に持っている攻撃性が認知面である社会的情報処理過程と健康面であるストレス反応との影響について共分散行動分析を用いて、因果関係の検討を行った。攻撃性の評価方法として、児童生徒自身が評価する自己評定と教師が評価する教師評定の両方を採用した。それ以外の変数については、自己評定で行った。分析の結果、小中学生ともに、表出性攻撃傾向が高い児童生徒より不表出性攻撃傾向が高い児童生徒の法がストレス反応を示しやすいことが明らかとなった。
<b>3 学術論文</b>				
1. 研究倫理審査システムの開発と評価(査読付)	共	2016年	武庫川女子大学紀要人文・社会科学編(2016年度刊行予定の雑誌に投稿中)	研究倫理に対する意識が、近年高まっている。そして、研究を行う際に研究倫理の申請が必須となってきた。しかし、申請が多くなることで、審査を行うことが増加してきている。そこで、審査を円滑に行うとともに、事務担当者の作業量を軽減することを目的として本研究を行った。 (共同研究者：竹中一平・松村憲一・半羽利美佳・玉木健弘・長岡雅美)「担当部分：審査システムの流れについて検討、申請に必要な内容についての検討」
2. 中学生用攻撃性質問紙(AQS)の作成と信頼性、妥当性の検討(査読付)	単	2016年	武庫川女子大学紀要人文・社会科学編(2016年度刊行予定の雑誌に投稿中)	本研究は、中学生の攻撃性を表出性攻撃ならびに不表出性攻撃の2側面から測定する質問紙を作成することを目的として実施した。質問紙の信頼性、妥当性を検討するため、調査1から調査3を行った。中学1年生から3年生1,683名を対象に実施した。分析の結果、本質問紙は、表出性ならびに不表出性攻撃を測定するにあたり、高い信頼性と妥当性をもつことが明らかにされた。
3. 小学生における食生活と学級満足との関連性(査読付)	共	2014年3月	福山大学人間文化学部紀要，14，107-120.	本研究は、小学生を対象に、食生活と学級満足との関連性を検討した。不登校などの問題行動と食生活との関連性について近年研究が行われてきた。そ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
4. 問題行動の発生要因と今後の対応方法(査読付)	単	2014年10月	青少年問題, 61, 48-53.	<p>の中で、食行動と問題行動との間に関連があることを示唆した研究も見られる。しかし、食事形態と学級満足度との関連性について、検討した研究は少ない。そこで、食生活と学級満足度との関連について調査を行い、問題行動予防について検討を行った。(共同研究者：野津山希・玉木健弘)「担当部分：論文執筆、データ分析」</p> <p>本研究は、現代の問題行動の発生要因と今後の対応策について、スクールカウンセラーとしてどのように対応するかを検討した。学校現場で発生する問題行動は多岐にわたる。さらに、発生要因が1つではなく、多数の要因が関連することも多い。そのため、これまでの経験をもとにした検討だけでなく、心理アセスメントなどを用いて、エビデンスベースでも発生要因を検討する必要性を示した。</p>
5. 現代青年の家族関係認知と自我同一性および抑うつとの関連(査読付)	共	2012年4月	武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要, 13, 51-56.	<p>本研究は、父子関係、母子関係、自我同一性、抑うつとの4点についての因果関係を男女別に検討を行った。その結果、男子青年において、父子関係の良好さが自我同一性の確立を促進していることが明らかとなった。女子青年については、母親を客観視できることが自我同一性の確立を促進していることが示された。(共同研究者：八木他恵子・玉木健弘)「担当部分：データ分析」</p>
6. 大学生の依存傾向に関する検討－質問紙調査および投影法検査を用いて－(査読付)	共	2011年4月	福山大学こころの健康相談室紀要, 5, 117-126.	<p>本研究は、大学生を対象に大学生の友人関係において発生する依存性の役割について、質問紙およびTATの反応分析によって明らかにすることを目的とした。その結果、質問紙得点の性差を検討した結果、有意差は認められなかった。次に依存欲求とTAT反応との関連を検討した結果、依存欲求の高い者は、TAT反応の無活動が多く見られた。(共同研究者：伊垣知美・玉木健弘・樋町美華)「担当部分：論文執筆、データ分析」</p>
7. 児童用学校生活の質(QOSL)尺度の作成(査読付)	共	2011年3月	福山大学こころの健康相談室紀要, 5, 127-134.	<p>本研究は、小学生を対象に児童用学校生活の質(QOSL)尺度の信頼性、妥当性の検討を行った。その結果、5因子が抽出され高い内的整合性が確認された。また、基準関連妥当性を検討するため、教員にアンケートおよび調査を行い、QOSL尺度との相関を検討した結果、高い正の相関が示された。このことから基準関連妥当性が確認された。(共同研究者：井場朱紗美・玉木健弘・樋町美華)「担当部分：論文執筆、データ分析」</p>
8. 不登校傾向の小中学生が示すPFスタディの特徴について(査読付)	共	2010年4月	福山大学こころの健康相談室紀要, 4, 35-42.	<p>本研究は、不登校傾向児に対して、PFスタディを用いて日常で起こりうる欲求不満場面での反応パターンを調査し、不登校傾向の児童生徒における特徴を検討することとした。その結果、調査参加者全員及び高低群のGCRの平均値が林(2007)の示す数値より、1SD以上低かったことから、先行研究で報告されているように、不登校児・生徒のGCRの傾向と同様に公的施設に通っている児童生徒のGCRの値も低い傾向にあることが明らかとなった。(共同研究者：串崎教子・玉木健弘)「担当部分：論文執筆、データ分析」</p>
9. 幼児期における色彩バウムテストとCBCLの関係(査読付)	共	2010年4月	福山大学こころの健康相談室紀要, 4, 75-82.	<p>本研究は、保育園児を対象に色彩バウムテストと他者評定であるCBCLを実施し、色彩バウムテストの描画特徴から読み取れる子どもの特徴がCBCLの結果にどのような関係があるかについて検討を行った。その結果、対象者全員のCBCLの各尺度、総得点ともに男女差は見られなかった。次に色彩バウムテストの描画特徴を検討した。その結果CBCL得点低群では、左傾き、花描写なしなどがみられた。CBCL得点高群では、描画位置中央、花、根、地平線、などがみられた。(共同研究者：道廣倫子・玉木健弘・日下部典子)「担当部分：論文執筆、データ分析」</p>
10. 大学生における主張性と対人ストレスの関係について(査読付)	共	2010年3月	福山大学こころの健康相談室紀要, 4, 9-16.	<p>本研究は、大学生を対象に主張性を質問紙法と投影法(PFスタディ)を用いて測定し、主張性とPFスタディの各指標が対人ストレスにどのように関係しているかを検討した。その結果、主張性と対人ストレスとの関連は、有意な相関は認められなかった。次にPFスタディと対人ストレスとの関連については、自分を守ろうとする率直な反応を強く示す女子は、男子よりも対人ストレスを多く感じていることが示された。(共同研究者：兎本由香里・玉木健弘・日下部典子)「担当部分：論文執筆、データ分析」</p>
11. 小学生における食事バランスと問題行動との関連性(査読付)	共	2009年3月	福山大学こころの健康相談室紀要, 3, 71-77.	<p>本研究は、小学生を対象に、教師評価および行動観察を行い、児童の問題行動傾向を把握、さらに質問紙調査により食事バランスについて検討した。そ</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
12. 不登校傾向のある小中学生の心理的well-beingと生活時間との関係性(査読付)	共	2009年3月	福山大学こころの健康相談室紀要, 3, 63-70	<p>の結果、児童の食生活の実態として、夕食では主食においてご飯が最も多く、次にカレーライスなどが摂取されていた。主菜において魚が多く、副菜ではお汁やサラダが多く摂取されていることが明らかになった。 (共同研究者：野津山希・玉木健弘)「担当部分：論文執筆、データ分析」</p> <p>本研究は、不登校傾向のある小中学生の生活習慣における時間(以下、生活時間)の使い方を調査し、その生活時間が、不登校傾向のある児童生徒の心理的well-beingにどのような影響を与えているかについて検討を行った。その結果、心理的well-beingにおいては、本研究の対象者は、積極的な他者関係を重視している傾向が見られた。また、支援機関や学校に登校することで基本的な生活リズムが整い、登校意欲も少しずつ持ち始めていることが明らかとなった。 (共同研究者：串崎教子・玉木健弘)「担当部分：論文執筆、データ分析」</p>
13. 幼児期の仲間関係と色彩バウムテストの関係性(査読付)	共	2009年3月	福山大学こころの健康相談室紀要, 3, 79-86	<p>本研究は、保育園児を対象に仲間指名調査で保育園児の仲間関係を把握し、仲間指名が多い子と仲間指名が少ない子の色彩バウムテストにおいて、色彩の使用および描画特徴を検討した。その結果、女子は、数人が中心になって仲間形成を行っていた。このことから、女子はグループ化し仲の良い子と行動する事が示唆された。また、男子は特定の子に指名が集中していないことから、状況に応じて仲間関係が変化することを明らかとなった。 (共同研究者：道廣倫子・玉木健弘)「担当部分：論文執筆、データ分析」</p>
14. 不登校児の食事形態について(査読付)	共	2008年3月	福山大学こころの健康相談室紀要, 2, 19-26	<p>近年、不登校児の食事形態について、注目されてきた。しかし、多くの調査が、不登校になっていない児童を対象としたものであった。また、調査方法も質問紙調査が多く見られ、実際の行動についての調査は、ほとんど行われていない。そのため、不登校や不登校傾向のある児童生徒の食事形態については、不明確な多く見られた。そこで、本研究では、不登校傾向ある児童と寝食を共にし、その中で食事形態を観察した。また、その中で、不登校児童に食事について質問し、食事形態について検討を行った。 (共同研究者：野津山希・玉木健弘)「担当部分：論文執筆、データ分析」</p>
15. スクールカウンセラーによる訪問面接の効果についての検討(査読付)	単	2008年3月	福山大学人間文化学部紀要, 8, 107-115.	<p>不登校児童生徒は、行事の場合でも学校へ登校することが困難な場合が多い。しかし、不登校支援の多くは学校内で行われる。そのため支援対象者が児童生徒ではなく、保護者になる場合が多くなる。不登校支援の中で、保護者への支援は、保護者自身の支援と間接的に児童生徒への支援につながることもあり、重要なものである。しかし、本人と会うことで、直接支援をすることも必要である。そのため、本研究では、登校することが困難な生徒を対象に、訪問面接を行い、訪問面接による不登校支援の効果について検討を行った。</p>
16. 大学生による不登校支援についての検討(査読付)	単	2007年3月	福山大学こころの健康相談室紀要, 1, 43-49.	<p>学校現場で不登校は、長年問題となっている。これまでの不登校支援は、スクールカウンセラーや教員による支援が多く行われてきた。しかし、中学生との考え方や関わり方などの面で、支援が不十分になることも考えられた。そこで、本研究では、不登校傾向のある児童生徒を対象としたキャンプに、小中学生と年齢が近い大学生が学生サポーターとして参加し、不登校児童生徒への支援の効果について検討した。</p>
17. 小中学校における特別支援教育についての検討(査読付)	単	2007年3月	福山大学人間文化学部紀要, 7, 93-102.	<p>小中学校で特別支援教育が本格的に行われるようになった。しかしながら、特別支援教育について、教職員の理解は、充分とは言えない。さらに、小中学校でも取り組みや特別支援教育への意識の違いが見られる。そこで、本論文では、小中学校での特別支援教育についての取り組みの違いを検討し、効果的な特別支援教育の実施について検討を行った。</p>
18. 発達障害児をかかえる母親への臨床心理学的援助(査読付)	単	2006年3月	福山大学人間文化学部紀要, 6, 53-62.	<p>近年、発達障害児に対する法律ができ、福祉や教育分野で様々な施策が行われるようになった。しかしながら、実際に子どもと関わる時間が多い家族、特に母親への援助は、十分だとはいえない状況にある。そこで、発達障害児をかかえる母親に対して、臨床心理学的な視点から母親を援助し、子どもならびに家族に対してより支援について考えた。母親に対する支援は、月1回、カウンセリングを行い、精神面でのストレス低減をはかるとともに、今後の</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
19. 中学生の攻撃性、社会的情報処理過程ならびにストレス反応の関連性(査読付)	共	2004年8月	学校保健研究, 46, 242-253.	方針について話を聞き、今できることは何かを検討し、見通しを立てた。 中学生を対象とし、攻撃性を表出しやすい生徒と表出しにくい生徒の社会的情報処理過程(認知過程)ならびにストレス反応への影響について検討した。攻撃性については、暴力や暴言など攻撃行動を表出しやすい攻撃性を表出性攻撃、攻撃行動を示さない攻撃性を不表出性攻撃に分類した。社会的情報処理過程については、Dodgeらが提唱した円環モデルを用いた。また、因果関係の検討については、共分散構造分析を行った。その結果、表出性および不表出性攻撃が高い生徒は、ストレス反応を示しやすいことが明らかとなった。 (共同研究者：玉木健弘・山崎勝之)(筆頭論文)「担当部分：論文執筆、データ分析」
20. 小学生における攻撃性が社会的情報処理に及ぼす影響(査読付)	単	2003年3月	犯罪心理学研究, 41, 1-15.	小学生を対象とし、攻撃性を表出しやすい児童と表出しにくい児童の社会的情報処理過程(認知過程)の違いについて検討した。攻撃性については、暴力や暴言など攻撃行動を表出しやすい攻撃性を表出性攻撃、攻撃行動を示さない攻撃性を不表出性攻撃に分類した。社会的情報処理過程については、Dodgeらが提唱した線型モデルを用い、第1段階から第5段階までについて調査を行った。また、因果関係の検討については、共分散構造分析を行った。その結果、表出性攻撃傾向のある児童は、他人の意図と悪意意図帰属しやすいことが示された。
21. 小学生用攻撃性質問紙(GAQC)の作成と信頼性および妥当性の検討	共	2002年9月	徳島文理大学研究紀要, 66, 19-26.	小学生の攻撃性を表出性攻撃ならびに不表出性攻撃に分類する質問紙の作成を試み、信頼性および妥当性の検討を行った。また、この質問紙は、小学校教諭によって評価されるものである。被評定者は、小学生1,404名を対象とした。本質問紙の分析の結果、まず、信頼性については、 $\alpha$ 係数および再検査法において高い数値を示した。次に妥当性については、因子的妥当性ならびに基準関連妥当性についても問題がないことが示された。このことから、本質問紙は、高い信頼性および妥当性を有した質問紙であることが明らかとなった。 (共同研究者：玉木健弘・山崎勝之・松永一郎)(筆頭論文)「担当部分：論文執筆、データ分析」
22. 中学生用攻撃性質問紙教師版(AQS-T)の作成と信頼性および妥当性の検討	共	2002年10月	徳島文理大学研究紀要, 64, 7-14.	中学生の攻撃性を表出性攻撃ならびに不表出性攻撃に分類する質問紙の作成を試み、信頼性および妥当性の検討を行った。また、この質問紙は、中学校教諭によって評価されるものである。被評者は中学生716名を対象とした。本質問紙の分析の結果、まず、信頼性については、 $\alpha$ 係数および再検査法において高い数値を示した。次に妥当性については、因子的妥当性ならびに基準関連妥当性についても問題がないことが示された。このことから、本質問紙は、高い信頼性および妥当性を有した質問紙であることが明らかとなった。 (共同研究者：玉木健弘・山崎勝之・松永一郎)(筆頭論文)「担当部分：論文執筆、データ分析」
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
1. 青少年の攻撃性は変化したか	共	2008年10月	日本犯罪心理学会第46回大会	攻撃性にまつわる議論は、これまで犯罪心理学領域において絶えずテーマとなってきた。また、犯罪領域において本題に関連すると思われる凶悪犯や粗暴犯は、近年、量的にさほど増加しているわけではない。しかし、非行臨床の現場で取り扱う個々のケースは一昔前と比べて青少年の心像に少し何か変化しているように思えるという声の実務家の中にある。このような変化について本シンポジウムにおいて議論した。また、本シンポジウムで高校生の攻撃性について、調査研究から得られた知見を報告した。 (企画者：福本浩行。話題提供者：玉木健弘 他2名)
<b>2. 学会発表</b>				
1. 女子大学生における感情的Well-beingが自己制御および攻撃性に及ぼす影響	単	2016年9月	日本犯罪心理学会第54回大会	本研究は、女子大学生を対象に、感情的Well-beingが自己制御および攻撃性に及ぼす影響について検討を行った。分析の結果、3変数間それぞれで有意差が示された。
2. ポジティブ・イリュージョンが怒り感情に及ぼす影響	共	2016年9月	日本犯罪心理学会第54回大会	本研究は、大学生を調査対象として研究を行い、自己の能力を過剰に評価する傾向であるポジティブ・イリュージョンが怒りやすさに及ぼす影響を検討した。(発表者：藤村真美子・玉木健弘)
3. The effects of aggression on mental health in female undergrad	単	2016年7月	31st International Congress of Psychology	The aim of this study was to investigate the effects of aggression on mental health of female

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
graduate students				e undergraduate students. Two hundred ninety st udents answered a questionnaire and results sho wed that there were significant effects of expr essive and inexpressive aggressions on their me ntal health.
4. 女子大学生の自尊心が自己制御なら びに 対人ストレスに及ぼす影響	単	2016年10月	日本教育心理学会第58 回総会	本研究は、自尊心、自己制御、ならびに対人スト レスラーが女子大学生におよぼす影響について検討 を行った。
5. 高校生のセルフ・コントロールが インターネット依存傾向および学 校適応感に及ぼす影響	共	2016年10月	日本教育心理学会第58 回総会	本研究は、高校生のセルフ・コントロールがネット 依存傾向を媒介して学校適応感に及ぼす影響を検 討した。(発表者：東野美佐子・玉木健弘)
6. 両親の夫婦間葛藤が女子大学生の 対人方略に及ぼす影響—P-Fスタ ディを用いて—	共	2015年9月	日本心理臨床学会第34 回大会	現代の子どもたちは対人関係能力や対人関係を円 滑に運ぶためのスキルを育むことが困難になってい る。その原因の一つとして親の夫婦関係が挙げられ ている。夫婦関係が良好である場合、子どもは攻撃 的な対処行動をとらないといった夫婦の関係性と子 どもの対人方略に関するこれまでの先行研究を支持 している。しかし、夫婦関係が良好でない場合、母 親と子どもが強く結びつき、子どもの発達や成長に 良い結果をもたらすとする報告もあり、一貫した結 果は得られていない。そこで本研究では、女子大学 生を対象に両親の夫婦間葛藤が対人方略に及ぼす影 響について検討を行った。 (共同研究者：海本久恵・玉木健弘)
7. 幼児におけるWISC-IVとDAMに關する 比較研究	単	2012年9月	日本心理臨床学会31回 大会	本研究は、保育園児を対象にWISC-IVとDAMの結果 を比較し、多面的に知能の検討を行った。まず、WIS C-IVで算出されたFSIQおよび各指標とDAMIQについて 検討を行った。その結果、FSIQがDAMIQより高い値を 示したのは7名、VCIがDAMIQより高い値を示したのは 8名、PRIがDAMIQより高い値を示したのは9名、WMIが DAMIQより高い値を示したのは8名、PSIがDAMIQより 高い値を示したのは7名であった。次に、FSIQの上位 下位、各2名のDAMIQについて検討した。その結果、 すべての対象者でFSIQがDAMIQより高い値を示した。 このことから、WISC-IVで算出されるFSIQは、DAMIQ より高い可能性が示唆された。
8. 小学校における心理的居場所感の 検討—自己受容との関連を通して—	共	2012年11月	日本教育心理学会第54 回総会	本研究は、相談相手に対する心理的居場所感の性 差および学年差の検討、また心理的居場所感が自己 受容にどのような影響を与えているかを検討するこ とを目的とした。分析の結果、「安心感」「役割感 」「被受容感」のすべてが「自己理解」に有意な標 準偏回帰係数を示し、また「被受容感」のみ「自己 承認」にも有意な標準偏回帰係数を示した。このこ とから、「安心感」「役割感」「被受容感」は自己 受容感の中でも自分自身を理解するという要因に影 響を与え、「被受容感」のみ 自分自身を受け入れる という要因にも影響を与えていることが明らかとな った。 (共同研究者：竹田優子・玉木健弘)
9. 女子大学生の攻撃性が社会的情報 処理ならびに精神的健康におよぼ す影響の検討	単	2012年11月	日本教育心理学会第54 回総会	本研究は、女子大学生の各攻撃性と社会的情報処 理過程ならびに精神的健康の因果関係を測定するた めに共分散構造分析を行った。その結果、表出性攻 撃から社会的情報処理過程をへて精神的健康に有意 なパスが見られたのは、身体的症状、不安と不眠、 うつ傾向であった。不表出性攻撃から社会的情報処 理過程をへて精神的健康に有意なパスが見られたの は、不安と不眠、うつ傾向であった。
10. 学級風土が児童の思いやり行動に 与える影響	共	2012年11月	日本教育心理学会第54 回総会	本研究は、学級の雰囲気捉える指標として学級 風土を用いて、学級風土が児童の思いやり行動に与 える影響について明らかにすることを目的とした。今 回の研究結果から、児童の思いやり行動に強い影響 力を持っている学級風土は、「意欲・親和」と「学 習志向性・規律正しさ」の2因子であることが示され た。特に、「意欲・親和」は、児童の思いやり行動 のすべてに影響を与えており、児童の思いやりを育 みやすい学級環境の中核をなすものであると考えら れる。「意欲・親和」といった学級風土が児童の思 いやり行動に影響を与える理由として、児童同士の 仲が良いだけでなく、教師と児童の間に信頼関係が 築かれた学級環境では、教師が思いやり行動のモデ ルとなり児童の思いやり行動が促進されやすくなっ たと推測された。 (共同研究者：近田悠香・玉木健弘)
11. 現代青年の家族関係認知と自我同 一性および抑うつとの関連	共	2011年9月	日本心理臨床学会第30 回大会	本研究では、母子関係、父子関係、自我同一性、 抑うつとの4点の因果関係を男女別に検討した。現代青 年の特徴をとらえるために、各因子得点を従属変数 としてt検定を行い、性差を検討した。その結果、父 親からの独立、母親への服従、母親からの独立にお



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
12. 特別支援教育における心理職による教師支援のあり方について—発達障害児と関わる教師の困難感と特性被援助志向性に着目して—	共	2011年9月	日本心理臨床学会第30回大会	<p>いて、女性が男性よりも有意に高かった。このことから、現代の男子青年において、父子関係の良好さが自我同一性の確立を促進していることが明らかとなった。女子青年においては、母親を客観視できることが自我同一性の確立を促進していることが示された。 (共同研究者：八木他恵子・玉木健弘)</p> <p>本研究は、困難感と被援助志向性の2つの教師の特徴が、心理職に期待する役割にどのような影響を与えているかを明らかにすることを目的として研究を行った。本研究の結果から、新任教師は援助に対する肯定感の高さが、ベテラン教師では援助に対する抵抗感の低さが、心理職への期待を高める上で重要な変数であることが示唆された。 (共同研究者：内藤聡子・玉木健弘)</p>
13. 児童用学校生活の質 (QOSL) 尺度の作成—信頼性および妥当性の検討—	共	2011年9月	日本心理学会第75回大会	<p>本研究は、小学生を対象に児童用学校生活の質(QOSL)尺度の信頼性、妥当性の検討を行った。その結果、5因子が抽出され高い内的整合性が確認された。また、基準関連妥当性を検討するため、教員にアンケートと調査を行い、QOSL尺度との相関を検討した結果、高い正の相関が示された。このことから基準関連妥当性が確認された。 (共同研究者：井場朱紗美・玉木健弘・樋町美華)</p>
14. 幼児における知能と発達との関連性についての検討(2) —WISC-IIIおよびDAMを用いて—	単	2011年9月	日本心理臨床学会第30回大会	<p>本研究では、簡便に実施ができ、なおかつ多面的に知能を測定する方法を検討するため、WISC-IIIとDAMを用いて、幼児の知能および発達との関連について調査を行った。まず、DAMで算出されたIQとWISC-IIIで算出されたIQについて検討を行った。その結果、DAMで算出されるIQは、WISC-IIIで算出されるIQより高い値を示す可能性が示唆された。次に、精神年齢がIQに及ぼす影響についての検討した結果、生活年齢と精神年齢の差が大きい者は、低いIQを示す可能性が明らかとなった。</p>
15. The Effects of Relationships between Family Cohesion on Social Skills and Aggression in Elementary School Children.	共	2011年8月	国際犯罪学会第16回世界大会	<p>本研究は、小学生370名を対象とし、家族凝集性が社会的スキルおよび攻撃性に与える影響について検討することを目的とした。その結果、家族にまとまりがあると感じている場合は、望ましい社会的スキルの獲得や、引込み思案行動、攻撃行動などが抑制される可能性が示唆された。また、各攻撃性に影響する社会的スキルには違いがあり、攻撃性の違いによって異なる種類の社会的スキルを獲得することが必要であると思われる。 (共同研究者：野津山希・玉木健弘)</p>
16. Examination of Aggressiveness in Middle and High School Students.	単	2011年8月	国際犯罪学会第16回世界大会	<p>本研究は、中学生と高校生の攻撃性の比較を行い、発達段階の違いにおける攻撃性の差異について検討を行った。まず、発達段階の違いを検討するため、中学1年生から高校3年生における各攻撃性の平均値の比較を行った。その結果、表出性および不表出性攻撃ともに中学1年生で最も高い値が示された。特に表出性攻撃では、発達段階が上がるにしたがって攻撃性平均値が減少していくことから、発達段階との関連が高いことが示唆された。</p>
17. 幼児における社会生活能力と問題行動との関連についての検討	共	2011年3月	日本発達心理学会第22回大会	<p>本研究では、実施が簡便な検査を用いて、個別指導計画の資料となる幼児の社会生活能力および問題行動との関連について検討を行った。社会生活能力と問題行動について、各群での差異を検討するためKruskal-WallisのH検定を行った。その結果、問題行動については、身体的訴え、社会性の問題、思考の問題、注意の問題、攻撃的行動で有意差が見られた。 (共同研究者：玉木健弘・野津山希)</p>
18. 発達リスク児における知能及び行動の特徴	共	2011年3月	発達心理学会第22回大会	<p>本研究は WISC-IIIとCBCLを用いて知能や認知、情緒や行動などの発達リスク児の特徴を、非発達リスク児との比較から明らかにすることを目的とした。分析の結果、WISC-IIIとCBCLの結果に対して、リスク群と非リスク群における差を検討するためにt検定を行った。その結果、WISC-IIIでは、IQと群指数、下位検査のすべてにおいて、リスク群と非リスク群との間に有意差は見られなかった。 (共同研究者：野津山希・玉木健弘)</p>
19. 高校における攻撃性とストレス—との関連性についての検討	単	2010年9月	日本心理学会第74回大会	<p>これまで高校生を対象とした、攻撃性とストレス—との関連についての研究は数少なかった。そこで本研究では、高校生における攻撃性とストレス—との関連について検討し、攻撃性とストレス—との関係を明らかにすることを目的とした。各攻撃性と各ストレス—との関係を検討するために、共分散構造分析を行った。分析の結果、各攻撃性と各ストレス—との関連については、攻撃性の違いに関係な</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
20. 幼児における気になる子どもの行動と知能との関連性	単	2010年3月	日本発達心理学会第21回大会	く、ストレスラーに強い影響を与えることが明らかとなった。 本研究は、保育士が「気になる子ども」と感じる子どもの特徴について明らかにするため、子どもの行動と知能の関連について検討した。対象児の行動面について検討するため、CBCLにおける各因子の素点を標準得点に変換し分析を行った。その結果、行動面については、社会性と注意に何らかの課題がある子どもは、保育士が「気になる子ども」と感じていることが示された。このことから、保育士が「気になる子ども」は、知的な遅れはないが、行動については、「社会性」および「注意」に課題がある子どもであることが示された。
21. 巡回発達相談による発達リスク児に対する支援	共	2010年03月	日本発達心理学会第21回大会	本研究は、巡回発達相談による発達にリスクを抱えた子どもに対する支援の在り方について検討を行った。調査の結果、巡回発達相談を通じて、リスクを抱えた子どもの就学を含めた早期支援に繋がる可能性が示唆された。しかしながら、今回の調査における相談員の役割は、発達にリスクを抱えた子どもと保育士との関わりが主であり、保護者への支援は充分とはいえなかった。このことから、子どもと一番身近におり、関わる機会のある保護者に対する支援が今後必要となってくると思われる。 (共同研究者：野津山希・玉木健弘)
22. 高校生における攻撃性が社会的情報処理に及ぼす影響	単	2009年08月	日本心理学会第73回大会	本研究は、高校生の攻撃性が社会的情報処理に及ぼす影響を検討し、攻撃性と社会的情報処理の関係を明らかにすることを目的とした。個別場面について、攻撃性から社会的情報処の第2段階へのパスについて、有意な負の関連を示した。集団場面の結果についても、個別場面とほぼ同様の結果となった。以上の分析の結果、攻撃性と社会的情報処理との関係は、個別場面と集団場面で違いがあることが示された。
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. 高等教育における学生支援：予防的介入から治療的介入まで	共	2015年9月	日本心理学会第79回大会	日本心理学会第79回大会で「高等教育における学生支援：予防的介入から治療的介入まで」の指定討論者を行った。
2. 児童養護施設女児の外来プレイセラピー—大学附設相談室における臨床心理実践(その2)—	共	2015年9月	日本心理臨床学会第34回大会	日本心理臨床学会第34回大会で「児童養護施設女児の外来プレイセラピー—大学附設相談室における臨床心理実践(その2)—」の指定討論者を行った。
3. 大学附設相談室における臨床心理実践(その1)—父子並行面接の事例を中心に—	共	2014年8月	日本心理臨床学会第33回大会	日本心理臨床学会第33回大会で、「大学附設相談室における臨床心理実践(その1)—父子並行面接の事例を中心に—」の指定討論者を行った。
4. 発達領域における攻撃研究の新展開(3)—暴力やいじめの予防と矯正を実現する介入研究—	共	2009年8月	日本心理学会第73回大会	日本心理学会第73回大会において、「発達領域における攻撃研究の新展開(3)—暴力やいじめの予防と矯正を実現する介入研究—」の企画を行った。
5. 発達領域における攻撃研究の新展開(2)—健康・適応との関連をみる—	共	2008年9月	日本心理学会第72回大会	日本心理学会第72回大会において「発達領域における攻撃研究の新展開(2)—健康・適応との関連をみる—」の企画および司会を行った。
6. 発達領域における攻撃研究の新展開—いじめ問題を意識して最新の関係性攻撃研究をみる—	共	2007年9月	日本心理学会第71回大会	日本心理学会第71回大会において、「発達領域における攻撃研究の新展開—いじめ問題を意識して最新の関係性攻撃研究をみる—」の企画および司会を行った。
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 女子大学生の認知および攻撃性が精神的健康におよぼすメカニズムの解明	単	2015年7月～ 2016年3月	武庫川学院科研費学内奨励金	認知および攻撃性が精神的健康に及ぼす影響について、これまで女子大学生を中心とした研究は、あまり行われてこなかった。そこで、本研究では、女子大学生の心理的・精神的な問題について検討し、攻撃性がおよぼす影響について検討する。
2. 高等教育におけるメンタルヘルス対策の検討：「留学生30万人計画」を見据えて	共	2015年7月～ 2016年3月	国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学	本研究では、未だに取り組みされていない、複数の高等教育機関にまたがったメンタルヘルス調査を出発点として、具体的なメンタルヘルス支援のあり方を検討することを目的としている。 (共同研究者：佐々木恵・玉木健弘)
3. 高等教育における学生のメンタルヘルス支援のあり方に関する検討：「留学生30万人計画」を見据えて	共	2015年6月～ 2016年3月	公益財団法人メンタルヘルス岡本記念財団	本研究では、複数の高等教育機関にまたがり、日本人学生・留学生、学部生・大学院生、その他の大学生の特性間で比較対照が可能なメンタルヘルスに関するデータを収集し、今後のメンタルヘルス支援のあり方について検討することを目的とする。 (共同研究者：佐々木恵・玉木健弘)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
4. コンサルテーション・リエゾンを活用した相談・支援体制の検討	単	2013年7月～ 2014年3月	武庫川学院科研費学内 奨励金	本研究の目的は、保育現場に対して、複数の専門家が連携して支援対象者に対応するコンサルテーション・リエゾンの概念を活用することにより、潜在的に発達の問題を有する、いわゆる「気になる子」への支援体制を見直し、効果的な保育支援を図る方法を確立すること、およびその方法の妥当性を検討した。
5. 女子大学生の認知および攻撃性が精神的健康に及ぼす影響についての検討	単	2011年7月～ 2012年3月	武庫川学院科研費学内 奨励金	本研究の目的は、女子大学生の精神的健康な問題について検討し、認知が攻撃性と精神的健康におよぼす影響について検討を行った。精神的健康に負の影響を与えられやすいのは、攻撃性を表に出しやすい人より、攻撃性を表に出にくい人であることが示唆された。以上の結果から、攻撃性の中でも怒り感情を表出にくい攻撃性である不表出性攻撃が、精神的健康に悪影響を与えることが明らかとなった。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2016年5月～現在	岡山県警察本部非行防止対策研究会コーディネーター
2. 2015年3月～現在	西宮市スクールカウンセラースーパーバイザー
3. 2012年4月～現在	神戸市教育委員会スクールカウンセラー
4. 2012年4月～2016年3月	兵庫県臨床心理士会 司法・法務・警察領域委員会事務局
5. 2010年8月～2011年9月	国際犯罪学会第16回世界大会準備委員
6. 2005年4月～2009年3月	広島県教育委員会スクールカウンセラー
7. 2003年4月～2005年3月	徳島県非常勤特別職スクールカウンセラー
8. 2003年4月～2005年3月	香川県公立学校スクールカウンセラー
9. 1998年4月～現在	所属学会：日本心理学会、日本教育心理学会、日本犯罪心理学会、日本学校保健学会、日本健康心理学会、日本発達心理学会、日本心理臨床学会、日本パーソナリティ心理学会、日本認知療法学会、日本カウンセリング学会、日本認知・行動療法学会、日本学校心理学会